

# ういねっと

Wakayama environmentalists NET work

和歌山県地球温暖化防止活動推進センター

第19号  
2010年2月5日

## COP15の評価とこれからの課題

昨年12月10日から17日までの1週間、「COP15ネットワーク関西」に加盟する諸団体から派遣される代表団41人の団長として、デンマークの首都コペンハーゲンで開かれたCOP15にNGOオブザーバーの一人として参加してきました。

滞在期間中、焦点の渦中にいる者にはむしろ得られる情報は限られていて、国際交渉がどのように進んでいるのか詳細にはわかりづらかったのですが、会場のベラセンターでもコペンハーゲンの目抜き通りを埋め尽くした10万人のデモンストレーションでも世界から集まった市民の熱い想いに直接触れ、得難い体験をすることができました。まず、わかやま環境ネットワークの仲間たちの支援で、こうした機会を与えられたことに感謝したいと思います。

### COP15の到達点

しかしCOP15の結果はご存じの通り。成果と呼べるほどのものはなにもひとつなく、07年末にインドネシアのバリで開かれたCOP13で世界が確認したロードマップ（工程表）、「COP15で京都議定書第一約束期間後、つまり2013年以降の温暖化対策の世界的枠組みを決定する」という国際公約は達成されませんでした。史上空前、世界120カ国以上の首脳が集い徹夜の交渉のあげく辛うじて世界に示したのは、「コペンハーゲン合意」に「留意」という結論に過ぎません。

蛇足ながら少し解説しますと、COP15は京都議定書（Kyoto protocol）のように法的拘束力のある国際協定（protocol）の締結が本来の目標でしたが、事前の準備交渉の経過から議長役のデンマーク政府などは早々とそれをあきらめ、次善の策として法的拘束力を伴わない首脳レベルの政治合意（Accord）を目指したのですが、これすら数カ国の反発で採択できず（国連の決定は全会一致が原則）、「留意」（takes note）という但し書きつき、つまり、各国政府はこのコペンハーゲン合意を意識する…といった程度の、なんとも不可解にして消化不良な結論に落ち着いたわけです。

では、その「コペンハーゲン合意」はいかなるものか。



COP15に課せられた課題は多くりましたが、中でも世界が緊急に合意すべき焦点のテーマは、①21世紀の気温上昇を2度未満に抑えること、②そのために世界の温暖化ガス排出を減少に転じる（ピークアウトという）時期の目標を決めること、③そこから2050年までに世界が減らす温暖化ガスの目標を決めること、④そこに至るまで2020年時点の国ごとの中期削減目標を決めること、そして⑤途上国が化石燃料に頼らず経済発展を遂げられるよう先進国からの資金的技術的支援の枠組みを決めることの5つに整理できます。

順番に言えば、コペンハーゲン合意は①と②には一般的に触れただけ、③には触れもせず、④は各国の自主目標を提出するにとどまり、かろうじて⑤のうち資金供与について不十分な目標が書き込まれただけの内容でした。さらに言えば、今後も交渉は続けることには合意しましたが、その交渉のゴールが地球温暖化を防ぐに足る法的枠組みに設定されているわけでもありません。つまり、破局の日まで長々と不毛の小田原評定が続く可能性もあるということで、まあ、こんな情けない「留意」でも決裂するよりはマシだったというのがCOP15の率直な評価でしょう。

### 先進国がリーダーシップを

では、COP15がこのような結果に終わった原因は何か。それはひと言でいえば大航海時代以来の列強による世界分割、近世の新植民地主義そして





現代の金融グローバリズムと幾世紀にもわたり続いた途上国収奪の報いではないか。開会前から、先進国と途上国の根深い対立が伝えられてはいました。ですが先進国側には、切り札として相当規模の資金援助を提示すれば、途上国も最後には軟化すると見ていたフシがあります。

しかし、先進国の経済発展の踏み台とされ、収奪され搾取され抜いてきた途上国側の先進国に対する不信は先進国の想像を絶して深く、骨抜き「コペンハーゲン合意」ですらこれをまとめた主要国の密室協議に反発する途上国の抗議で「留意」に格下げされたのでした。いま世界の温暖化対策のリーダー役を演じているEUを含め、先進国はそうした途上国の骨肉に達する深い不信を読み誤りました。先進国がその汚辱にまみれた歴史をいま償うことなしに、暗礁に乗り上げた現在の事態は打開する

ことはできないでしょう。

先進国がなすべき事は二つあります。まず途上国の犠牲のうえになし遂げた経済発展過程で排出した温暖化ガスが現代の地球温暖化を招いたことを認め、途上国も納得できるほど厳しい削減目標を自らに課すこと。第二には、途上国が化石燃料に頼らない新たな経済発展の道を歩むに十分な資金的技術的支援を行うことです。先進国が腹をくくってこうしたリーダーシップを発揮する以外、破局的な温暖化を防ぐ突破口は開けません。

## 求められる強力な市民運動

COP15は残念な結果に終わりました。しかし、だからといっていつまでもガッカリしてはいられません。振り返ってみれば、先進国の首脳たちが途上国の不信をぬぐい、合意への強力なリーダーシップを発揮するよう迫るには世界、わけても日本の環境市民運動の力は余りにも弱かった。そうした意味では、我々もCOP15の結果に責任なしとはしないからです。

こうしている間にも、人類に残された時間は刻一刻と消費されています。ボヤボヤしている暇はありません。先進国の政府を行動に踏み出させるのは、私たち先進国の市民に課せられた歴史的な責務です。前途は容易ではありませんが、倦まずたゆまず、この道を進むしかありません。COP15の全経過はそのことを改めて示したといえるでしょう。

## COP15に参加して

吉田八重子

人生初めての海外への旅をCOP15開催地デンマークに選んだ動機は、高野山地救フォーラムにデンマーク大使をお迎えした時、デンマークでは国民一人一人が環境意識を持ち行動していると述べられました。温暖化防止を生活の中でどう取り組んで居られるのだろうか？ 大いなる希望を持ってCOP15に参加しました。現地には数々のすばらしい取り組みが見られました。

### ■ 自然エネルギー

- 1 風力発電が盛んで、環境に優しい持続可能な生活。
- 2 太陽光発電による安定と健康な生活。
- 3 程よい街の照明効果で電気消費を抑え、ホテル、店、バスから見える家の明かりは、窓辺のツリーのみ。
- 4 貝を屋根に置き、冷暖房効果と景観に役だっていた。
- 5 海洋民族の歴史と伝統ある人々の暮らしに、自然と共に生き自然を大切に生きる生き方が感じられました。
- 6 水の資源。生態系豊かな堀や池の水は清く澄んで。
- 7 子供達の居場所には大樹と広い空間の公園図書館がありました。森林の多彩さによるCO2削減の示唆に富む場所は、心を開放させ人間性を豊かにさせるエネルギーが満ちていました。
- 8 照明にランプ、ローソク等心癒す効果がみられた。

### ■ 道路事情

中央分離帯のないパレードの道は対向車線の外側に自転車線があり一方通行で自転車がスピードだして走行します。レン

ガの道が続きました。

### ■ 飲み物の容器

ビール、コココーラ、ジュースの器は同じ形のピン(リターナブル瓶)を使用しています。

また、ゴミがひとつもありません。わが国ではプラスチック、紙、缶など使用廃棄されたゴミは美しい山、海、街、のいたる場所で見かけられます。デンマークの街にはゴミのポイ捨てがまったく見当たりませんでした。この問題解決には国、業者、消費者、すべての人が真剣になり取り組む事がCO2削減と観光日本の経済効果を高め、次世代への国づくりになると確信します。

最後に、今回生活に密着した事で一番強く感じた事はゴミの事と食への取り組みに関してです。それは、食の安全は温暖化防止と深く関わり、オーガニック野菜がごく当たり前に流通し、市民がそれを食っています。デンマークではこれを見事に定着させ、ホテル、お店、福祉施設、学校など有機野菜のパプリカ、トマト、さつまいも、人参、玉葱、大きなとうがらしなど自然の恵みがいっぱいです。それは見事です。「美味しい！」野菜に感動！この野菜を栽培する広大な大地が果てしなく続く光景に感動しました。私も昨年より有機栽培を目指して野菜の生産に携わって居りますが、農家が担う命を守る生産に無農薬野菜を作る喜びと消費者の皆様の健康をお届けする大きな使命を、ますます自覚しました。温暖化防止は多方面にわたりますが、COP15の世界の市民たちのCO2削減の思いは5万人のパレードとなり人類の課題目標に迎いCOP15の成果を出す様、日々精進いたします。

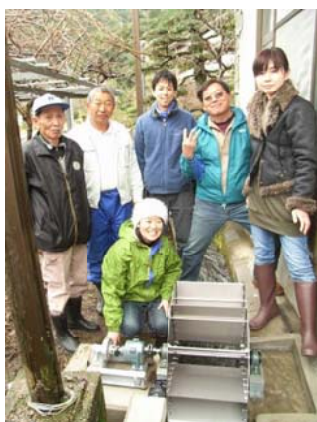
このコーナーはわかやま環境ネットワークに参加する団体や企業、個人の活動記録と今後の展望を紹介します。

NPO法人紀州えこなびとでは、「環境配慮の推進と地域の課題解決に向け、まずは地域に住む自分達が楽しく取り組もう」という考えのもと、「エコを視点にまちづくり」をテーマに掲げ、学びと実践をセットにした様々な活動を展開しています。

今回ご紹介するのは、そうした活動の一つである市民共同発電事業。平成17年に和歌山県で初めてとなる市民共同発電施設の設置を皮切りに、これまで計5基の発電施設を設置してきました。

市民共同発電事業5基目の取り組みでは、和歌山県東牟婁郡那智勝浦町二河に、市民独自の取り組みとしては全国的にみても例の少ない小水力発電施設を設置しました

(平成21年1月にベースシステム完成)。私たちは、小水力発電が地域に分散しているエネルギーの有効活用に加え、災害時には山間部での電力供給源として機能するものと考えています。設置したベースシステムは、発電量5~10w(24時間発電可能)、バッテリー65A×4台と小規模ではありますが、通常時は二河地域の防



犯灯の電力や環境学習の機材として活用され、災害時には、避難場所へと飲料水を供給する井戸水の汲み上げポンプの電源として活用(フル充電で4時間の連続運転が可能)されます。

実際、昨年秋の大型台風により二河地域が停電した際には、バッテリーの電力が活躍したそうです。現在は、発電用の水車の増設「発電量：2w×9基」に取り組んでおり、更なる発電が期待されています。

紀州えこなびと 山本将功



### 『里山保全の新たなウェーブを！』

耕作放棄地の再生や放置林の整備活動に、今、多くの市民ボランティアが参加しています。里山の美しい「景観」やその「公益的機能」の受益者は市民なので、当然といえば当然かも知れません。しかし、同時に、地球の健康を守り、地球温暖化を防止し、子どもたちの未来を守ろうとの意識が徐々に高まりつつあるのではないかと、現代文明の破綻に気付き始め、「自然回帰」を求める意識が少しずつ「行動」に転化し始めているのではないかと、市民参加型の『新たなウェーブ』が始まりつつあるといえるのです。

はしもと里山保全アクションチームも今年で創設18年目、15000㎡、40枚の耕作放棄された棚田の再生活動を行っています。12月には愛知県日進市の「NPOにつしん市民環境ネット」の皆さんと共同して里山保全活動を実施しました。「里山保全活動」は並大抵でできるものではありません。遠方からの「同志」を迎え共同活動をしたことは、技術や仕組みを学ぶこと以上に「勇気」を頂



きました。

21世紀、早急に地球温暖化を防止するには、市民が「農」に関わることに。土を耕し、作物を育て、取れた作物をおいしく食べることの循環を通して自然と深く関わることに。育てる喜びと自給自足の安心感。そのことによって価値観が変わる。食品や食材を選択するという日常的な行動の中に、大量のCO2排出を削減の鍵があります。里山は地球を救う最も有効な『装置』であるから。

はしもと里山保全アクションチーム  
事務局長 佐藤 俊



# 事務局だより

## 2月11日に事務所移転します

前号で「12月下旬に下記の新事務所に移転する予定」とお知らせいたしましたが、例の「事業仕分け」で来年度の見通しがたらず、延期しておりました。この度、来年度の事業がある程度復活し、事務所移転を予定通り行うこととなりました。

電話番号はこれまでと同じです。

### 新事務所

〒640-8269 和歌山市小松原通3丁目22

### 当面の日程

- 2月11日 事務所移転
- 2月13・14日 一村一品全国大会
- 2月20日 紀の川食育フェア（粉河ふるさとセンター）
- 2月28日 STOP温暖化講演会in紀南（講師：和田 武氏）  
於：那智勝浦町体育文化会館（13:30～）
- 3月21日 「未来の食卓」上映会（橋本市民会館）



### 上映のお知らせ

食育ドキュメンタリー映画「未来の食卓」(仏)



子どもたちに安心できる「食」を提供する仕組みを創造し、同時に、地産地消への関心を高め、健康な地域社会をつくることを目的として食育ドキュメンタリーを上映します。さらに、有機農業を推進し環境共生型社会の創造によって、地球温暖化を防止する必要があります。お誘い合わせの上、ぜひご来場ください。

3月21日(日) 午前10時・午後1時の2回上映、入場無料、

橋本市民会館大ホール

主催：橋本市地球温暖化対策協議会  
後援：和歌山県、橋本市、橋本市教育委員会

## 和歌山市エコライフ学習会受付始まる！

前号でお伝えしたとおり、わかやま環境ネットワークでは、「エコライフ促進事業」を和歌山市から受託し、昨年10月から実施しています。この事業の柱は、市内至るところで、あらゆるつながりを利用して、環境（特に地球温暖化問題に関する）啓発の学習会を開いていくというものです。講師となる5人の新人職員の研修も終え、いよいよ学習会開催者の募集を始めました。皆様のお住まいの自治会、関係する各種団体、お子さんの学校やPTAなどにご紹介頂けたら幸いです。なお、学習会の概要は以下の通りです。

- プログラム内容（地球温暖化、水と下水道、ごみとリサイクル、など開催者の関心に合わせて内容を組みさせていただきます。学校や子どもクラブなどでは、体験型の学習プログラムも実施できます。）
- 開催日時・時間（土日祝日を含むご希望の日時にお伺いします。夜は21時まで。時間は1時間半程度。）
- 定員（数名～50名くらい）
- 会場（地区の会館など、開催者にご用意いただきます。有料施設の場合はご相談下さい。和歌山市内に限りです。）
- 費用（わかやま環境ネットワークが負担します。開催者・参加者の負担はいっさいありません。）
- 申し込み（わかやま環境ネットワークに電話、FAXまたはメールで直接ご連絡下さい。）



ういねっと (わかやま環境ネットワーク通信) 第19号 (2010年2月5日発行)

発行：NPOわかやま環境ネットワーク

代表理事 重柄 隆

〒640-8269 和歌山市小松原通3丁目22

電話 073(432)0234 FAX 073(432)3881

mail: wenet@vaw.ne.jp

http://wenet.info/